

---

# クチビルニウタ

遠江 上総

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クチビルニウタ

### 【Nコード】

N9929B

### 【作者名】

遠江 上総

### 【あらすじ】

昔から知っている歌の詳細が知りたくなつた和葉。手掛かりを掴むために身近な人に質問するが、手掛かりを持っていたのは…。

クチビルニウタヲ乗セテ誓ウヨ  
永遠ニ変ワルコトノ無イ  
コノ愛ヲ…。

\*\*\*

昔覚えた歌を無意識に鼻歌で歌っていたら、友人に、何の歌なん？  
それ、と尋ねられた。  
聞いたことない？と聞き返すと、全く、と冷たい返事が返ってきた。  
でも、この歌、何の歌なんやろ…。  
子守歌のような不思議なメロディーに、意味の無さそうな歌詞。  
それでも、アタシの記憶に残って離れない不思議な歌。  
あかん、今まで気にしてなかったのに、一回気になるとどうしても  
知りたくなってしまふ。

\*\*\*

「なあ、お父ちゃん。この歌、何の歌かわかる？」

とりあえず、非番で家にいたお父ちゃんに聞いてみた。

アタシの昔のことはお父ちゃんに聞くのが一番、そう思った。

「あー、和葉、その歌好きやなあ。」

「知つとるん？」

「知つとるも何も、お前が小学生の時からずっと歌ってるんじゃないか。」

「うん、まあ。」

「小学校で習ったんとちゃうんか？」

違う、らしい。

この間この話をした友人は小学校からの付き合いだから、小学校で習ったとしたら聞いたことぐらいはあるはず。

「ちゃうんよ…。」

「そうか、すまん。俺にはわからんわ。」

申し訳なさそうに笑う父ちゃんに、しゃあないわ、と言い、自分の部屋に戻った。

ベッドに寝転がって、もう一度歌を口ずさむ。

…せや、平次ならわかるかしらん。

突発的にそう思って、ベッドから飛び起きて玄関に向かった。

途中、足音を聞いて、どっか行くんか、と聞くお父ちゃんに、平次ん家、と告げる。

玄関で靴を履き、扉に手をかけようとした瞬間、その扉が開いた。

「うおっ、和葉。こんなとこで何してん…、って、そか、出かけるんか。」

「うん、まあ…。」

「どこ行くん？」

そう聞かれ、アタシは平次を指差した。

会いに行くはずの人が此処に居るんだから、出掛ける意味はもう無い。

「平次ん家、行こう思ってたん…。」

「そうなんか。じゃ、かまわんな。」

「…何が？」

「東京いくで」

「今からあ?!」

平次の笑顔に促され、バタバタと準備をして東京行きの新幹線に乗り込んだ。

\*\*\*

東京に着いて向かったのは工藤くんの家だった。

先週あった事件の後始末?に行くとかなんとか言ってたけど、アタシにはどうでもよくて、蘭ちゃんに会うことだけを目的としていた。

工藤邸の玄関で迎えてくれた蘭ちゃんと再会を喜び合っていたら、工藤くんはクスクス笑って、中でどうぞ、と言った。

リビングに通されたアタシらに蘭ちゃんは紅茶を出してくれた。

なんか、新妻つて感じやなあ、て思いながら持ってきてもらった紅茶を飲んでいたら時に人の家でくつろぎまくってる平次が呟いた。

「…平和やなあ。」

「平和が一番、だろ?」

平次も、それに応える工藤くんも、どこかつまらなそうだった。

不謹慎やなあ。

アタシらはいつまでも平和であって欲しいんだけど。

そうや、そんな二人にアタシに解けない謎を解いてもらおう。

「なあ、平次、この歌聞いたことあらへんかなあ。」

歌いだした時、平次の顔に驚愕の表情が浮かんだ気がした。でも、そんな雰囲気はすぐに消えた。そしてしかめっ面で答えが返ってきた。

「しらん、聞いたことあらへん」

「そっか。」

平次も聞いたことが無いのならもうお手上げだ。すっかり行き詰まってしまった。

「…俺、聞いたことがある…気がする」

思いもよらず手掛かりをくれたのは工藤くんだった。

「え…？」

「私も、聞いたことがある…ような…。」

蘭ちゃんまでもが反応を示してくれる。

一体この曲は何なんや？

「あ、もしかして…。」

工藤くんはそう言い残して、リビングを出て行った。

平次はというと、せっかくの謎なのにずっと仏頂面を浮かべたまま。

「多分、コレじゃないかな。」

そう言いながら戻ってきた工藤くんの手には一枚のCDがあった。

見たことのない英単語がならんでいるジャケットだったから題名も何もわからない。

「これ？」

「そう。多分合ってると思うよ。聞いてごらん」

そう言いながら再生の準備をする工藤くんは楽しそうな顔をしている。

しばらくして、曲が流れてきたけど、全く聞いたことの無いクラシックのメロディ。

「これが何なん？」

「しっ。もうちょっと聞いてればわかるよ。」

不思議に思いながら聞いていると曲の後半で聞き覚えのあるメロディが流れてきた。

「あ。」

「あ、やっぱりこれだ。」

嬉しそうに笑う工藤くんが言う。

「これってもしかして、この間掃除してた時におじさまの書斎で見つけたCD？」

「そう。『cradle・song』、『子守歌』って言うんだけど……」

「歌詞は？」

「ああ。多分、オリジナルだと思う。書いてないんだ。そんなこと。」

また、行き止まり。

アタシ、勝手に歌詞付けた覚えなんかないし。

「遠山さん。もっかい歌ってくれる？」

言われたとおりに歌うと、工藤くんが歌詞を書き留めた。

カナリアの歌で

静かに眠れ

今は何も考えず

明日が楽しくあるように

夢見てスヤスヤと

僕たちはきつと

明日も一緒だから

よく考えると子守歌にも聞こえる。

工藤くんと蘭ちゃんと3人で歌詞を覗き込んでいたら突然工藤くんが笑い出した。

「くつつ、くくくつ。わりい、これは俺が関わっちゃいけないかってみてえだ。」

笑い声を押し殺しながら、一瞬、平次の方に意味あり気な視線を投げかけた。それを受けて平次は降参したように苦笑した。

一体何なん？

「これは遠山さんのためだけの歌なんだ」

「言ってる意味がわかんないよ、新一。」

蘭ちゃんもアタシも状況が理解できない。

「いつかわかるときが来るよ」

工藤くんはそう言って優しく微笑んだ後、何も言わなくなった。そして平次と先週の事件の話が始めた。

アタシと蘭ちゃんはそれ以上聞けなくなってしまった。

\*\*\*

「全てを平仮名にしてごらん」

見送りに来てくれた工藤くんがくれた最後のヒント。言われて平仮名にしてみたけどやっぱりわからない。

かなりあのうたで

しずかにねむれ

いまはなにもかんがえず

あしたがたのしくあるように

ゆめみてすやすやと

ぼくたちはきつと

あしたもいっしょだから

「なあ、平次。わかる？」

「しらん」

窓の外をみながらぶっきらぼつな返事が返ってくる。

「なんで怒っとるん？」

「別に。」

不思議に思いながら、アタシは新幹線のアナウンスをBGMに手帳に書いた平仮名と格闘していた。

「あの歌詞、オメーが作ったんだろ？」

新幹線を待つ、駅のホームで確信の意味を込めて尋ねられて俺はまた苦笑した。

「隠してもしかあないか…。探偵のダチつーのはタチが悪いなあ」

「それは俺にも言えるんだけど…。」

そう言つて二人で軽く笑つて俺は昔話をした。

「昔な、和葉が家に泊まりに来たことがあつてな。その夜はえろう近くで雷がなつとつて、和葉は客間で寝とつたんやけど、怖くて眠れんゆうてな、俺んどこ来たんや。」

「で、あの歌を？」

「ああ。お袋が好きで、ガキの頃昼寝する度に掛かつとつたさかい、覚えてしもたこの曲に歌詞をつけてな。」

「気障なことやつてたんだなあ、オメー。」

始終笑いかみ殺しながら工藤が言う。  
気障なんて、お前に言われたないわ。

「遠山さんが誰からのメッセージか覚えてなくて残念だな。」

「いや、歌を覚えてたことに俺はびっくりや。…それより、和葉に

なんで答え、教えんかったんや？」

話題を変えたくてふった質問に笑いながらの答えが帰ってきた。

「言っただけ良かったのかよ…。これは自分で気づくべき問題だろ？」

まあ、そうなんだが…。

そこで新幹線の発車を告げるアナウンスが流れた。

気づいて欲しいんだか欲しくないんだか、とても複雑な状況で、それでも気になるのはメッセージの解読状況。横目でチラッと盗み見るつもりだった。

「なんや、コイツ。寝てまいよった」

通路側に傾く首をそっと自分の肩にのせて、あの歌を口ずさむ。

【か】なりあのうたで

し【ず】かにねむれ

いま【は】なにもかんがえず

あした【が】たのしくあるように

ゆめみて【す】やすやと

ぼくたちは【き】っと

あしたもいっしょ【だ】から

歌に込めた『和葉が好きだ』という思い。

いつか気づくだろうか。

いや、その前に自分で伝えてしまっただろうか。

色んな未来を描きながら、俺も眠りについた。

\*\*\*

クチビルにウタを乗せて誓うよ

永遠に変わることのない

この愛を…

(後書き)

初投稿作品です。

拙い文章ですが、読んでいただけて嬉しく思います。

関西弁がおかしいところや、日本語すら危ういところが多々あると思います。ご勘弁を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9929b/>

---

クチビルニウタ

2010年10月11日20時01分発行